



愛隣幼稚園..... 園だより 12.7月号

ビニール傘の風景

2ヶ月連続で雨の話題になってしまいますが・・・先月の園だよりの最後に“ちょっと奮発して雨の日が楽しくなる私のためのレイングッズを購入するのもお勧めです”という一言を書きました。それから2週間後、私は渋谷駅前のスクランブル交差点で異様な光景を目にしてみました。短大時代の仲間3人と雨の降る夜の交差点を渡ろうとしていた時のことです。目の前に広がる傘の波を見ながら「何か変?どこか変?」と感じていました。「あっそうか!」変?の原因は、そこを歩き交う人々のさす傘にありました。なんと8~9割の人の傘がビニール傘だったのです。それは私にとっては異様な光景でした。その日は朝から雨でした。ですから私たちおばさん4人は誰ひとりビニール傘ではありませんでした。なのに渋谷のスクランブル交差点では私たちが圧倒的に少ない人種に属していたのです。嵐のあとのニュースで見る放置された大量のビニール傘の残骸。これではあの映像ももっともなことです。家に帰り「ただいま」もそこそこに私は大学生の娘をつかまえました。そしてついさっき目にした驚きの光景について語り、質問を加えました。「ねえ、あなたの大学の友達はどういう日にもビニール傘をさすの?」「ううん、大学の友達にはビニール傘の子はいないよ。急に雨が降ってきた時は違うけど・・・」少なくとも女子大生の大多数は選んで購入した傘を使っているようです。少しほっとしました。もちろん我が家ではおばさん代表の私も、中学生の娘も、ビニール傘ではありません。幼稚園でも千葉の街でも、あれほどたくさんのビニール傘に埋め尽くされた雨の日の風景を見たことはありませんでした。どんな年代のどんな人たちがビニール傘を愛用すると、あの風景になるのかと不思議でなりませんでした。と同時に、頭の中は「もったいない」という気持ちでいっぱいになりました。

日本には「もったいない」という素敵な言葉があります。小さい頃からよく聞かされた言葉です。祖母がよく使っていた言葉です。物を大切に使うこと、食べ物や粗末にしないこと、を当り前のこととして教えられました。そういえば祖母は包装紙もそこにかけられていた紐も全部大事に押し入れにしまっていました。それを私もしっかり受け継いでいます。子どもたちが小さい頃には、食べ残しのおかずが「もったいなくて」、自分のお腹の中に収納しては、後悔したりしていました。2004年、「もったいないおばあさん」(真珠まりこ作)という絵本が出版されました。同じ年にノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイさんが翌年日本を訪れた際、この日本語を知り「MOTTAINAI」という言葉とその意味を世界中に広めようという呼びかけを始めました。英語には訳せない言葉、日本人が昔から大切にしてきた気持ちです。真珠まりこさんは絵本のあとがきにこう記しています。『「もったいない」という日本語はものの価値を生かしきることなくかたんに捨ててしまったり、むだづかいするときに使われていますが、ことばの中には、自然の恵みや、ものを作ってくれた人への感謝と思いやりの気持ちがこめられています。』そうです。ただ無駄づかいを諫めている言葉ではないのです。『感謝』や『思いやり』の気持ちが込められている言葉なのです。

あの日のビニール傘の波は、私の目に雨の都会を殺風景なものとして焼き付けました。ひとり一人にはたった1本の傘の話です。でも、どうせ壊れてしまうから、どうせ失くしてしまうからという気持ちが集まったら、そこに広がったのはたくさんの人が創りだす『殺風景』でした。今、色とりどりの紫陽花が梅雨の風景を豊かに演出しています。私たちも『感謝』や『思いやり』の気持ちで織りなす風景を彩るひとり一人でありたいと思います。「もったいない」は未来を生きる子どもたちにも大切にしたい。豊かな心象風景に彩られた日本の四季がいつまでもありますように。